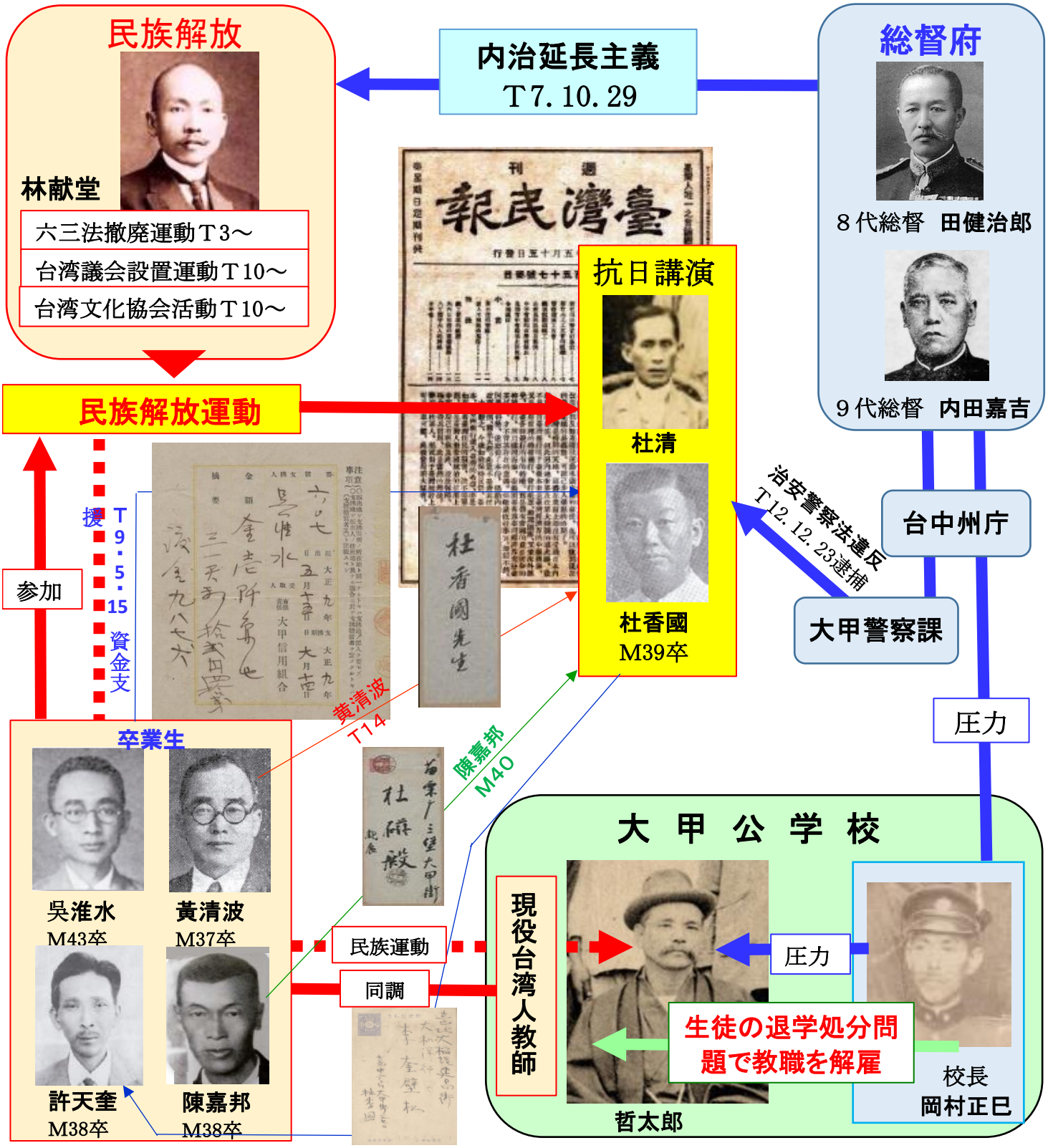
15　総督府と卒業生の狭間での苦悩と教職の解雇



台湾解放民族運動の口火を切った林献堂は、郷里の台中市で運動を始めました。台中市は大甲街に近く、その運動はいち早く大甲街に流れ込みました。大甲の青年有志は「台湾民報」をむさぼり読み、林献堂が提唱する「六三法撤廃運動」は、「台湾議会設置請願運動」「台湾文化協会」へと発展拡大していきました。大甲公学校でも、生徒の保護者、卒業生、台湾人教師の大部分が文化協会に入り、民族解放を叫び、文化啓蒙運動に挺身する状況で、官憲に拘束される者も出ました。哲太郎はこの情勢を静観していましたが、運動は拡がるばかりで、総督府の一官吏として悩みました。そんな中、哲太郎は、日本人教師と言い争った生徒の退学処分をめぐって校長に掛け合いましたが聞き入れられず、哲太郎自身も教職の身分を解かれ、農場の管理者として異動を命ぜられました。